

CATALYST FOR TRIMERIZING ETHYLENE AND TRIMERIZATION OF ETHYLENE IN PRESENCE OF THE SAME

Publication number: JP11092408

Publication date: 1999-04-06

Inventor: OGURI MOTOHIRO; MIMURA HIDEYUKI; AOYAMA TAKAMITSU; OKADA HISANORI; KOIE YASUYUKI

Applicant: TOSOH CORP

Classification:

- international: **B01J31/20; C07B61/00; C07C2/08; C07C2/26; C07C11/113; B01J31/16; C07B61/00; C07C2/00; C07C11/00; (IPC1-7): C07C11/113; B01J31/20; C07B61/00; C07C2/08; C07C2/26**

- European:

Application number: JP19970255370 19970919

Priority number(s): JP19970255370 19970919

Report a data error here

Abstract of JP11092408

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain the subject catalyst for efficiently and highly selectively producing 1-hexene useful as a raw material comonomer for linear low density polyethylene from ethylene by including a chromium compound, an alkyl metal compound and a specific electron donor.
SOLUTION: This catalyst comprises a neutral ligand or anionic sulfur ligand- containing chromium compound of the formula: CrAm [(m) is an integer of 1-6; A is carbon monoxide or the like), an alkyl compound of the formula: R_p MX_q [0<(p)<=3, 0<=(q)<3, (p)+(q) is 1 to 3; M is lithium or the like; R is a 1-10C alkyl; X is H or the like), and one or more kinds of electron donors selected from ether compounds, ester compounds, imine compounds, isonitrile compounds, phosphine compounds, phosphine oxide compounds and phosphite compounds, and, if necessary, an aluminoxane having a hydrolysis ratio of <=0.7.

Data supplied from the *esp@cenet* database - Worldwide

(19)日本特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平11-92408

(43)公開日 平成11年(1999)4月6日

(51)IntCl. ⁴ C 0 7 C 11/113 B 0 1 J 31/20 C 0 7 B 61/00 C 0 7 C 2/08 2/26	識別記号 3 0 0 	F I C 0 7 C 11/113 B 0 1 J 31/20 C 0 7 B 61/00 C 0 7 C 2/08 2/26
		審査請求 未請求 請求項の数 6 O L (全 9 頁)
(21)出願番号 特願平9-255370	(71)出願人 000003300 東ソー株式会社 山口県新南陽市開成町4500番地 (72)発明者 小栗 元宏 三重県四日市市別名6-7-8 (72)発明者 三村 英之 三重県四日市市別名3-5-1 (72)発明者 青山 隆夫 三重県四日市市青葉町800-255 (72)発明者 岡田 久則 三重県四日市市垂坂町360-1 (72)発明者 鯉江 泰之 三重県員弁郡東員町城山2-28-14	
(22)出願日 平成9年(1997)9月19日		

(54)【発明の名称】 エチレンの三量化触媒及びそれを用いたエチレンの三量化方法

(57)【要約】

【課題】 線状低密度ポリエチレン (LLDPE) の原料モノマーとして有用な1-ヘキセンを効率よくかつ高選択的に得ることができ、しかも触媒調製操作や取扱いが容易なエチレンの三量化触媒及びそれを用いたエチレンの三量化方法を提供する。

【解決手段】 クロム化合物、アルキル金属化合物とエーテル化合物、エステル化合物、イミン化合物、イソニトリル化合物、ホスフィン化合物、ホスフィンオキシド化合物及びホスファイト化合物からなる群より選ばれた1種以上の電子供与体からなるエチレンの三量化触媒を用いる。

【特許請求の範囲】

【請求項1】クロム化合物、アルキル金属化合物とエーテル化合物、エステル化合物、イミン化合物、イソニトリ化合物、ホスフィン化合物、ホスフィンオキシド化合物及びホスファイト化合物からなる群より選ばれた1種以上の電子供与体からなるエチレンの三量体触媒。

【請求項2】クロム化合物が下記一般式(1)



(式中、mは1～6の整数である。またAは一価炭素、アレーン、アルケン、アルキン、窒素、イソニトリ、ホスフィン、ホスファイト、スルフィド、スルホキシド、チオカルボキシレート基、ジチオカルボキシレート基及びチオアルコキシ基からなる群より選ばれた1種以上を表す)で示される中性配位子又はアニオン性イオン配位子を含有するクロム化合物であることを特徴とする請求項1に記載のエチレンの三量体触媒。

【請求項3】アルキル金属化合物が下記一般式(2)



(式中、pは $0 < p \leq 3$ であり、qは $0 \leq q < 3$ であって、しかも $p+q=1\sim3$ である。Mはリチウム、マグネシウム、亜鉛、ポロニウムはアルミニウムを表し、Rは炭素数1～10のアルキル基からなる群より選ばれた1種以上を表し、又は水素原子、アルコキシ基、アリール基及びハロゲン原子からなる群より選ばれた1種以上を表す)で示される化合物であることを特徴とする請求項1又は請求項2に記載のエチレンの三量体触媒。

【請求項4】請求項1乃至請求項3のいずれかに記載のエチレンの三量体触媒に、更に加水分解比0.7以下のアルミノキサンが含まれることを特徴とするエチレンの三量体触媒。

【請求項5】請求項1乃至請求項4のいずれかに記載のエチレンの三量体触媒の存在下で、エチレンを三量化することを特徴とするエチレンの三量化方法。

【請求項6】エチレンの三量体触媒が光の照射を受けていることを特徴とする請求項5に記載のエチレンの三量化方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、エチレン三量体触媒、及びそれを用いたエチレンの三量化方法に関する。さらに詳しくは、線状低密度ポリエチレン(LLDPE)の原料モノマーとして有用な1-ヘキセンを効率よくかつ高選択的に得ることができ、しかも触媒調製操作や取扱いが容易なエチレンの三量体触媒、及びそれを用いたエチレンの三量化方法に関する。

【0002】

【従来の技術】エチレンを三量化して1-ヘキセンを得る方法において、クロム化合物を触媒として用いることは公知である。例えば、特開昭62-265237号公報にはクロム化合物、加水分解比0.8～1.1のポリ

ヒドロカルビルアルミニウムオキシド(以下、アルミノキサンと称する)及びエーテル化合物、アミン化合物又はイソニトリ化合物等のドナー配位子からなる触媒系が開示されている。また、特開平6-239920号公報には、クロム化合物、ピロール含有化合物、金属アルギン及びハイドライドからなる触媒系が、また特開9-20692号公報には、クロム塩と金属アミドの反応生成物、無機酸化物固体、アルミノキサン及び電子供与体化合物からなる触媒系が開示されている。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】クロム化合物を触媒として用いるエチレンの三量化方法においては、エチレンの三量化反応終了時に廃クロム触媒の処理を必要とするが、触媒を構成するクロム化合物は構造によっては極めて毒性が強い化合物を作る。それ故、安全性の面から、クロム金属の使用量をできるだけ少なくする必要があるが、特開昭62-265237号公報に記載の方法では、クロム当たりの活性が十分でなく、クロム化合物を大量に用いなければならないという問題があった。また、触媒活性発現のためには触媒組成成分の一つとして、加水分解比0.8～1.1のアルミノキサンを用いることが必須である。しかし、アルミノキサンは炭化水素溶媒中でアルキルアルミニウム化合物と水の反応により得られるが、加水分解比0.8～1.2にコントロールすると、不均質な析出物が得られやすい等、一定の物性を有するアルミノキサンを得ることは難しく、それ故に触媒活性の再現性がなかった。またアルミノキサンは不安定であることから保存安定性に乏しい等、触媒の再現性の面で問題があった。

【0004】また、特開平6-239920号公報に記載の方法は、クロム当たりの活性を改善して、クロム化合物の使用量を抑制している。しかしこの方法では、触媒調製操作が複雑な上に、触媒の成分であるピロール含有化合物は、空気に対して極めて不安定な物質であるため着色しやすい等、取り扱いが難しく、工業的な触媒としてはまだ十分なものではなかった。また、特開9-20692号公報に記載の方法は、触媒の構成成分として無機酸化物固体を必須とするため、無機酸化物固体の焼成や乾燥等の触媒調製操作が複雑になる上に、触媒はスラリー液になるため触媒液の取扱いや反応器への触媒の導入が難しいという問題があった。

【0005】本発明は上記の課題に鑑みてなされたものであり、その目的は触媒調製操作や取扱いが容易な工業的に有利な触媒系を提供し、しかもLLDPEの原料モノマーとして有用な1-ヘキセンをエチレンから効率よく、かつ高選択的に得ることができるエチレンの三量化方法を提供することである。

【0006】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、上記の課題を解決するための鋭意検討を行った結果、クロム化

物、アルキル金属化合物及び特定の電子供与体からなる触媒は触媒調製操作や取扱いが容易であり、この触媒の存在下にエチレンの三量化反応を行なうと、非常に高い触媒活性と高選択性を示すことを見出し、本発明を完成するに至った。即ち本発明は、クロム化合物、アルキル金属化合物とエーテル化合物、エステル化合物、イミン化合物、イソニトリル化合物、ホスフィン化合物、ホスフィンオキシド化合物及びホスファイト化合物からなる群より選ばれた1種以上の電子供与体からなるエチレン三量化触媒、及びそれを用いたエチレンの三量化方法に関する。

【0007】

【発明の実施の形態】次に、本発明について更に詳しく説明する。

【0008】本発明においては、クロム化合物が用いられる。このクロム化合物としては、特に制限するものではないが、例えば、下記一般式(1)



(式中、mは1～6の整数である。またAは一酸化炭素、アレーン、アルケン、アルキン、窒素、イソニトリル、ホスフィン、ホスファイト、スルフィド、スルホキシド、チオカルボキシレート基、ジチオカルボキシレート基及びチオアルコキシ基からなる群より選ばれた1種以上を表す)で示される中性配位子又はアニオン性イオン配位子を含有するクロム化合物が好適なものとして用いられる。

【0009】上記一般式(1)において、アレーンとしては、特に限定するものではないが、例えば、ベンゼン、トルエン、エチルベンゼン、イソプロピルベンゼン、n-ブチルベンゼン、キシレン、ジイソプロピルベンゼン、ジブチルベンゼン、トリメチルベンゼン、テトラメチルベンゼン、ヘキサメチルベンゼン、トリフェニルベンゼン、安息香酸メチル、安息香酸エチル、テレフタル酸ジメチル、フルオロベンゼン、アニソール、フェニル酢酸エチル、スチレン、フェニルアセチレン、トリメチルシリルベンゼン、トリエトキシシリルベンゼン、トリメチルゲルマニウムベンゼン、トリメチルスタニルベンゼン、トリフェニルボラン、トリフェニルホスフィン、フェニルメチルスルフィド、ビフェニル、ジフェニルエタン、ジフェニルプロパン、ジフェニルブタン、ジフェニルエチレン、ジフェニルブタジエン、ナフタレン、テトラヒドロナフタレン、ジヒドロナフタレン、アセナフチレン、アントラセン、ジヒドロアントラセン、フェナンスレン、ジヒドロフェナンスレン、インダン、インデン、フルオレン、ヒレン、ベンゾチオフェン、フラン又はチオフェン等が挙げられる。また、アレーンとして芳香族化合物を含むポリマーも含まれる。

【0010】アルケンとしては、特に限定するものではないが、例えば、エチレン、プロピレン、ブテン、ペンテン、ヘキセン、ヘプテン、オクテン、ノネン、デセ

ン、シクロペンテン、シクロヘキセン、シクロヘプテン、シクロオクテン、ブタジエン、イソブレン、オクタジエン、シクロオクタジエン、オクタトリエン、シクロオクタトリエン又はシクロヘプタトリエン等が挙げられる。アルキンとしては、特に限定するものではないが、例えば、アセチレン、フェニルアセチレン、ジフェニルアセチレン又はアセチレンジカルボン酸ジエチルエステル等が挙げられる。イソニトリルとしては、特に限定するものではないが、例えば、シクロヘキシルイソニトリル又はn-ブチルイソニトリル等が挙げられる。ホスフィンとしては、特に限定するものではないが、例えば、トリメチルホスフィン、トリエチルホスフィン、トリブチルホスフィン、トリシクロヘキシルホスフィン、トリフルオロホスフィン、トリフェニルホスフィン、ジフェニルメチルホスフィン、フェニルジメチルホスフィン又はジメチルホスフィノエタン等が挙げられる。ホスファイトとしては、特に限定するものではないが、例えば、トリメチルホスファイト、トリブチルホスファイト又はトリフェニルホスファイト等が挙げられる。スルフィドとしては、特に限定するものではないが、例えば、ジメチルスルフィド、ジエチルスルフィド、ジブチルスルフィド、ジフェニルスルフィド、テトラメチルスルフィド又はフェニルメチルスルフィド等が挙げられる。スルホキシドとしては、特に限定するものではないが、例えば、ジメチルスルホキシド、テトラメチルスルホキシド又はジフェニルスルホキシド等が挙げられる。チオカルボキシレート基としては、特に限定するものではないが、例えば、チオアセテート基又はチオペンゾエート基等が挙げられる。ジチオカルボキシレート基としては、特に限定するものではないが、例えば、ジチオアセテート基又はジチオペンゾエート基等が挙げられる。チオアルコキシ基としては、特に限定するものではないが、例えば、チオメトキシ基、チオエトキシ基、チオプロピル基又はチオフェノキシ基等が挙げられる。

【0011】上記一般式(1)で示されるクロム化合物としては、特に限定するものではないが、例えば、ヘキサカルボニルクロム(0)、ペンタカルボニル(トリフェニルホスフィン)クロム(0)、テトラカルボニルビス(エチレン)クロム(0)、トリカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(トルエン)クロム(0)、トリカルボニル(エチルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(イソプロピルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(n-ブチルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(キシレン)クロム(0)、トリカルボニル(ジイソプロピルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(ジブチルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(テトラメチルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(トリフェニルベンゼン)

クロム(0)、トリカルボニル(スチレン)クロム(0)、トリカルボニル(フェニルアセチレン)クロム(0)、トリカルボニル(トリメチルシリルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(トリエトキシシリルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(トリメチルゲルマニウムベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(トリメチルスズニルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル[1,4-ビス(トリブチルスチル)ベンゼン]クロム(0)、トリカルボニル(トリフェニルボラン)クロム(0)、トリカルボニル(トリフェニルホスフィン)クロム(0)、トリカルボニル(フェニルメチルスルフィド)クロム(0)、トリカルボニル(ビフェニル)クロム(0)、トリカルボニル(ジフェニルエタン)クロム(0)、トリカルボニル(ジフェニルプロパン)クロム(0)、トリカルボニル(ジフェニルブタン)クロム(0)、トリカルボニル(ジフェニルエチレン)クロム(0)、トリカルボニル(ジフェニルブタジエン)クロム(0)、トリカルボニル(ナフタレン)クロム(0)、トリカルボニル(テトラヒドロナフタレン)クロム(0)、トリカルボニル(ジヒドロナフタレン)クロム(0)、トリカルボニル(アセナフチレン)クロム(0)、トリカルボニル(アントラセン)クロム(0)、トリカルボニル(ジヒドロアントラセン)クロム(0)、トリカルボニル(フェナンスレン)クロム(0)、トリカルボニル(ジヒドロフェナンスレン)クロム(0)、トリカルボニル(インダゲン)クロム(0)、トリカルボニル(インデン)クロム(0)、トリカルボニル(フルオレン)クロム(0)、トリカルボニル(ビレン)クロム(0)、トリカルボニル(ベンゾチオフェン)クロム(0)、トリカルボニル(チオフェン)クロム(0)、トリカルボニル(シクロヘプタトリエン)クロム(0)、トリカルボニルトリス(ヒープチルイソニトリル)クロム(0)、トリカルボニルトリス(トリフェニルホスファイト)クロム(0)、(エチレン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(エチレン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(エチレン)ジカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、(エチレン)ジカルボニル(ナフタレン)クロム(0)、(プロピレン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(ブテン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(ペンテン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(ヘキセン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(ヘプテン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(オクテン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(ノネン)ジカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、(デセン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(シクロペンテン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(シクロヘキセン)ジカルボニル(ベンゼン)

ン)クロム(0)、(シクロヘプテン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(シクロオクテン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(プタジエン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(イソプレン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(オクタジエン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(シクロオクタジエン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(オクタトリエン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(シクロオクタトリエン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(アセチレン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(フェニルアセチレン)ジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、(ジフェニルアセチレン)ジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、(ベンゾニトリル)ジカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、シクロヘキシルイソニトリルジカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、トリフェニルホスフィンジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、トリメチルホスフィンジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、トリエチルホスフィンジカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、トリブチルホスフィンジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、トリシクロヘキシルホスフィンジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、トリフルオロホスフィンジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、ジフェニルメチルホスフィンジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、メチルジフェニルホスフィンジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、ジメチルホスフィノエタンジカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、トリメチルホスファイトジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、トリフェニルホスファイトジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、テトラメチルホスフィドジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、ジメチルスルホキシドジカルボニル(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)、テトラメチルスルホキシドジカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、ジフェニルスルホキシドジカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、[トリフェニルホスフィンジカルボニルクロム(0)]ダイマー、ビス(ベンゼン)クロム(0)、ビス(エチルベンゼン)クロム(0)、ビス(ヘキサメチルベンゼン)クロム(0)等が挙げられる。

【0012】さらにクロム(II)トリス(チオアセテート)、クロム(II)トリス(チオベンゾエート)、クロム(II)トリス(2-エチルチオヘキサノエート)、クロム(II)トリス(チオアセテート)、クロム(III)トリス(チオベンゾエート)、クロム(III)トリス(2-エチルチオヘキサノエート)、クロム(III)トリス(ジチオアセテート)、クロム

(I I) トリス(ジチオベンゾエート)、クロム(I I) トリス(2-エチルジチオヘキサノエート)、クロム(I I I) トリス(ジチオセテート)、クロム(I I I) トリス(ジチオベンゾエート)、クロム(I I I) トリス(2-エチルジチオヘキサノエート)、クロム(I I I) トリス(チオメトキシド)、クロム(I I I) トリス(チオエトキシド)、クロム(I I I) トリス(チオプロキシド)、クロム(I I I) トリス(チオフェノキシド)、クロム(I V) テトラキス(チオメトキシド)、クロム(I V) テトラキス(チオエトキシド)、クロム(I V) テトラキス(チオプロキシド)、クロム(I V) テトラキス(チオフェノキシド)等が挙げられる。

【0013】前記のチオカルボキシレート基、ジチオカルボキシレート基又はチオアルコキシ基を有するクロム化合物は、特に限定するものではなく、公知の方法で合成できる。例えば、クロム塩と下記一般式(3)



(式中、 R^1 は炭素数1~20の炭化水素基、炭素数1~10のアシル基又は炭素数1~10のチオアシル基を表し、Mは周期律表第1又は2族の金属元素を表す)で示されるイオウ化合物との反応により合成できる。クロム塩としては、フッ化クロム(I I)、フッ化クロム(I I I)、塩化クロム(I I)、塩化クロム(I I I)、臭化クロム(I I)、臭化クロム(I I I)、ヨウ化クロム(I I)、ヨウ化クロム(I I I)が挙げられ、なかでも塩化クロム(I I)、塩化クロム(I I I)が好ましい。イオウ化合物としては、ナトリウムチオアセテート、カリウムチオベンゾエート、カルシウムチオベンゾエート、ナトリウムチオメトキシド、カリウムチオエトキシド、リチウムチオプロキシド、リチウムチオフェノキシド等が挙げられる。クロム塩と上記一般式(3)で示されるイオウ化合物との反応は、ジエチルエーテル、テトラヒドロフラン、ジオキサン、1,2-ジメトキシエタン等のようなエーテル系溶媒中で行われる。反応温度は-78℃~60℃、好ましくは-20℃~40℃で、また反応時間は10分~48時、好ましくは30分~10時間で反応が行われ、クロム塩に対するイオウ化合物の比は1.5~3.5の範囲で行うことが好ましい。この反応により、金属塩が副生して反応系に析出するが、別にによりこの金属塩を除去する。その後、エーテル系溶媒を減圧下で除去して、得られた固体をベンゼン、ヘキサン、ヘプタン、オクタン、イソオクタン、ノナン、デカン、シクロペンタン、シクロヘキサン、メチルシクロヘキサン、シクロオクタン、デカリン等の脂肪族炭化水素に溶解してチオカルボキシレート基、ジチオカルボキシレート基又はチオアルコキシ基を有するクロム化合物とする。

【0014】また上記のクロム化合物と電子受容体からなる錯体も好適に使用することができる。電子受容体と

しては、特に限定するものではないが、例えば、トリニトロベンゼン又はテトラシアノエチレン等が挙げられる。従って、クロム化合物と電子受容体からなる錯体としては、例えば、トリカルボニル(ベンゼン)クロム(0)・トリニトロベンゼン、トリカルボニル(トルエン)クロム(0)・トリニトロベンゼン、トリカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)・トリニトロベンゼン、トリカルボニル(ベンゼン)クロム(0)・テトラシアノエチレン、トリカルボニル(トルエン)クロム(0)・テトラシアノエチレン、トリカルボニル(キシレン)クロム(0)・テトラシアノエチレン、トリカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)・テトラシアノエチレン、トリカルボニル(アニソール)クロム(0)・テトラシアノエチレン等が挙げられる。

【0015】これらのうち触媒活性の面から、一酸化炭素を含有するクロム化合物又はチオアルコキシ基を有するクロム化合物が好ましく用いられる。より好ましくは、ヘキサカルボニルクロム(0)、トリカルボニル(ベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(トリメチルベンゼン)クロム(0)、トリカルボニル(ナフタレン)クロム(0)、トリカルボニル(トリナリン)クロム(0)、トリカルボニル(シクロヘプタトリエン)クロム(0)が用いられる。また、上記クロム化合物はそれぞれ単独で使用し得るのみならず、二種以上を混合して用いることも可能である。

【0016】本発明において使用されるアルキル金属化合物は、特に限定するものではないが、例えば、下記一般式(2)



(式中、 p は $0 < p \leq 3$ であり、 q は $0 \leq q < 3$ であって、しかも $p+q$ は1~3である。Mはリチウム、マグネシウム、亜鉛、ボロン又はアルミニウムを表し、Rは炭素数1~10のアルキル基からなる群より選ばれた1種以上を表し、Xは水素原子、アルコキシ基、アリール基及びハロゲン原子からなる群より選ばれた1種以上を表す)で示される化合物が好適なものとして用いられる。

【0017】上記一般式(2)において、炭素数1~10のアルキル基としては、特に限定するものではないが、例えば、メチル基、エチル基、プロピル基、ブチル基、シクロヘキシル基又はオクチル基等が挙げられる。アルコキシ基としては、特に限定するものではないが、例えば、メトキシ基、エトキシ基、プロピル基、又はフェノキシ基等が挙げられる。アリール基としては、特に限定するものではないが、例えば、フェニル基等が挙げられる。ハロゲン原子としては、特に限定するものではないが、例えば、フッ素、塩素、臭素又はヨウ素が挙げられる。

【0018】なお、上記一般式(2)において、MがAlで、 p と q がそれぞれ1、5のとき、 AlR_1X_5 、 AlR_5X_1

となる。このような化合物は、理論的には存在しないが、通常、慣用的に $Al_3R_3X_3$ のセスキ体として表現されており、これらの化合物も本発明に含まれる。

【0019】上記一般式(2)で示されるアルキル金属化合物としては、例えば、メチルリチウム、エチルリチウム、プロピルリチウム、*n*-ブチルリチウム、*s*-ブチルリチウム、*t*-ブチルリチウム、ジエチルマグネシウム、エチルブチルマグネシウム、エチルクロロマグネシウム、エチルブチルマグネシウム、ジメチル亜鉛、ジエチル亜鉛、ジブチル亜鉛、トリメチルボラン、トリエチルボラン、トリメチルアルミニウム、トリエチルアルミニウム、トリイソブチルアルミニウム、トリ-*n*-ヘキシルアルミニウム、トリ-*n*-オクチルアルミニウム、トリシクロヘキシルアルミニウム、ジメチルエチルアルミニウム、ジエチルアルミニウムヒドリド、ジイソブチルアルミニウムヒドリド、ジエチルアルミニウムエトキシド、ジエチルアルミニウムフェノキシド、ジシクロヘキシルフェニルアルミニウム、エチルアルミニウムエトキシクロリド、ジエチルアルミニウムクロリド、ジエチルアルミニウムブロミド、ジイソブチルアルミニウムクロリド、ジシクロヘキシルアルミニウムクロリド、メチルアルミニウムセスキクロリド、エチルアルミニウムセスキクロリド、ブチルアルミニウムセスキクロリド、エチルアルミニウムジクロリド、イソブチルアルミニウムジクロリド等が挙げられる。

【0020】これらアルキル金属化合物のうち入手の容易性及び活性の面からアルキルアルミニウム化合物が好ましく用いられ、さらに好ましくはトリエチルアルミニウム又はトリイソブチルアルミニウムが用いられる。これらのアルキル金属化合物は単独で使用し得るのみならず、二種以上を混合して用いることも可能である。

【0021】アルキル金属化合物の使用量は、クロム化合物1モルに対して0.1~10.000当量であり、好ましくは3~30.000当量、より好ましくは5~20.000当量である。

【0022】本発明においては、エーテル化合物、エステル化合物、イミン化合物、イソニトリル化合物、ホスフィン化合物、ホスフィンオキシド化合物及びホスファイト化合物からなる群より選ばれた1種以上の電子供与体が用いられる。上記のエーテル化合物としては、エーテル基を含有する化合物であれば特に制限するものではないが、例えば、ジエチルエーテル、メチル-*t*-ブチルエーテル、テトラヒドロフラン、1,2-ジメトキシエタン、ジエチングリコールジメチルエーテル、トリエチングリコールジメチルエーテル、アニソール、ジエトキシフェニルシラン、エトキシジメチルシラン、ビス(トリメチルシリル)エーテル、フラン、2-メチルフラン、3-メチルフラン等が挙げられる。エステル化合物としては、エステル基を含有する化合物であれば特に制限するものではないが、例えば、酢酸エチ

ル、酢酸ブチル、安息香酸ブチル等が挙げられる。イソニトリル化合物としては、C=N結合を含有する化合物であれば特に制限するものではないが、例えば、ベンズアルデヒドエチルイミン、ベンズアルデヒドフェニルイミン又はベンズアルデヒドベンジルイミン等が挙げられる。イソニトリル化合物としては、イソニトリル基を含有する化合物であれば特に制限するものではないが、例えば、*t*-ブチルイソニトリル、シクロヘキシルイソニトリル等が挙げられる。ホスフィン化合物としては、特に制限するものではないが、例えば、トリフェニルホスフィン、トリトリルホスフィン、トリシクロヘキシルホスフィン、トリオクチルホスフィン、トリブチルホスフィン、トリエチルホスフィン等が挙げられ、ホスフィンオキシド化合物としては、例えば、トリフェニルホスファイト、トリトリルホスファイト、トリシクロヘキシルホスファイト、トリオクチルホスファイト、トリブチルホスファイト、トリエチルホスファイト等が挙げられる。

【0023】これらのうち触媒活性や1-ヘキセン選択性の面から、エーテル化合物又はイソニトリル化合物が好ましく用いられ、より好ましくは1,2-ジメトキシエタン、シクロヘキシルイソニトリルが用いられる。また、上記電子供与体はそれぞれ単独で使用し得るのみならず、二種以上を混合して用いることも可能である。またこの電子供与体の使用量は、クロム化合物1モルに対して0.01~10.000当量であり、好ましくは0.05~10.000当量、より好ましくは0.1~2.000当量である。電子供与体の使用量がクロム化合物1モルに対して0.01当量未満の場合はポリエチレンが多量に副生する。一方、使用量がクロム化合物1モルに対して10.000当量を超える場合には触媒活性が増加せず経済的に好ましくない。

【0024】本発明のエチレンの三量化触媒は、前記のクロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体を原料に、溶媒中で接触させることにより調整できる。接触方法は特に制限されないが、例えば、クロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体を前もって接触させて触媒を調整した後、エチレンと接触させて三量化反応を行う方法、三量化反応原料であるエチレンの存在下にクロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体を接触させて触媒を調整し、接触と同時に三量化反応を開始する方法が採られる。具体的には、前者の場合は、(1)クロム化合物および電子供与体を含む溶液にアルキル金属化合物を導入する、(2)アルキル金属化合物及び電子供与体を含む溶液にクロム化合物を導入する、(3)アルキル金属化合物を含有溶液にクロム化合物及び電子供与体を導入する、(4)クロム化合物を含む溶液に電子供与体とアルキル金属化合物を導入する、といった方

法により触媒を調製することができる。又、後者の場合は、(1)クロム化合物、アルキル金属化合物、電子供与体及びエチレンをそれぞれ同時に独立に反応系に導入する。(2)アルキル金属化合物を含む溶液にクロム化合物、電子供与体及びエチレンを導入する。(3)クロム化合物、電子供与体を含む溶液にアルキル金属化合物及びエチレンを導入する。(4)アルキル金属化合物及び電子供与体を含む溶液にクロム化合物及びエチレンを導入する。(5)クロム化合物を含む溶液にアルキル金属化合物、電子供与体及びエチレンを導入する、という方法により触媒を調製することができる。なお、これらの原料の混合順序は特に制限はされない。

【0025】この触媒を調製する際の、クロム化合物の濃度は特に制限されないが、通常溶媒1リットルあたり、0.001マイクログラム〜100ミリモル、好ましくは0.01マイクログラム〜10ミリモルの濃度で使用される。これより小さい触媒濃度では十分な活性が得られず、逆にこれより大きい触媒濃度では、触媒活性が増加せず経済的でない。またここで用いられる溶媒としては、例えば、ブタン、ペンタン、ヘキサン、ヘプタン、オクタン、イソオクタン、ノナン、デカン、シクロペンタン、シクロヘキサン、メチルシクロヘキサン、シクロオクタン、デカリン等の脂肪族炭化水素類及びベンゼン、トルエン、キシレン、エチルベンゼン、クメン、クロロベンゼン、シクロペンゼン等の芳香族炭化水素類が挙げられる。また反応生成物、例えば、1-ヘキセンを溶媒として用いることもできる。これらの溶媒はそれぞれ単独で使用し得るのみならず、二種以上を混合して用いることも可能である。ここで、触媒調製時のクロム化合物濃度をコントロールする目的で、必要に応じて濃縮や希釈しても差し支えない。

【0026】また、クロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体を接触させる際の温度は−100〜250℃、好ましくは0〜200℃である。接触時間は特に制限されないが、0分〜24時間、好ましくは0分〜2時間である。なお、接触時のすべての操作は、空気と水分を避けて行うことが望ましい。また、原料及び溶媒は十分に乾燥しておくことが好ましい。

【0027】本発明によれば、上記の如く調製されたクロム化合物、アルキル金属化合物とエーテル化合物、エステル化合物、イミン化合物、イソニトリル化合物、ホスフィン化合物、ホスフィンオキシド化合物及びホスファイト化合物からなる群より選ばれた1種以上の電子供与体からなる触媒系に、更に加水分解比0.7以下のアルミノキサンを添加し、エチレンの三量体触媒として供することが好ましい。加水分解比0.7以下のアルミノキサンの共存により触媒活性が向上する等の効果が認められる。

【0028】本発明において使用されるアルミノキサンとは、前記のアルキルアルミニウム化合物と水とを一定

範囲内の量比で反応させて得られる加水分解生成物である。アルキルアルミニウム化合物としては、トリメチルアルミニウム、トリエチルアルミニウム、トリイソブチルアルミニウム、トリヘキシルアルミニウム、トリオクチルアルミニウムが挙げられ、なかでもトリイソブチルアルミニウムが好ましい。アルキルアルミニウム化合物を加水分解する方法については、特に限定するものではなく、公知の方法で合成できる。例えば、(1)アルキルアルミニウム化合物そのまま、又は有機溶媒への希釈溶液に水を接触させる方法、(2)アルキルアルミニウム化合物と塩化マグネシウム・6水塩、硫酸鉄・7水塩、硫酸銅・5水塩等の金属塩の結晶水と反応させる方法、等が採られる。具体的には、前記特開昭62-265237号公報や特開昭62-148491号公報に開示されている。又、前記のように積極的に加水分解を行うことなく、水を微量溶解している炭化水素等の有機溶媒とアルキルアルミニウム化合物を混合するだけでも十分効果を発揮する。

【0029】加水分解を行う際の水に対するアルキルアルミニウム化合物のモル比(加水分解比)は、取扱い易さや触媒活性の面から、0.7以下、好ましくは0.5以下である。加水分解比が0.7より高い場合は、不均質な析出物ができやすくなり、触媒活性の再現性の点で問題があり、またポリエチレンが多量に副生する等好ましくない。

【0030】加水分解比0.7以下のアルミノキサンの添加時期は、前記の触媒調製時に添加してもよいし、またエチレンの三量体反応系に直接添加してもよい。またこの加水分解比0.7以下のアルミノキサンの使用量は、クロム化合物1モルに対して0.01〜5,000当量であり、好ましくは0.1〜2,000当量、より好ましくは0.5〜1,000当量である。

【0031】このようにして調製された触媒を用いてエチレンの三量体反応を行なう。本発明においてクロム触媒の使用量は特に制限されないが、通常、前記溶媒で希釈し、三量体反応液1リットルあたり、クロム化合物が0.001マイクログラム〜100ミリモルの濃度、好ましくは0.01マイクログラム〜10ミリモルの濃度で使用される。これより小さい触媒濃度では十分な活性が得られず、逆にこれより大きい触媒濃度では、触媒活性が増加せず経済的でない。

【0032】本発明におけるエチレンの三量体反応の温度は、−100〜250℃であるが、好ましくは0〜200℃である。反応圧力は、三量体反応系がエチレン雰囲気であれば、特に制限されないが、通常、絶対圧で0〜3,000kg/cm²であり、好ましくは0〜300kg/cm²である。また、反応時間は温度や圧力に左右され、一概に決めることはできないが、通常、5秒〜6時間である。また、エチレンは、前記の圧力を保つように連続的に供給してもよいし、反応開始時に前記圧

力で封入して反応させてもよい。原料ガスであるエチレンには、反応に不活性なガス、例えば窒素、アルゴン、ヘリウム等が含まれても何ら差し支えない。なお、三量化反応のすべりの操作は、空気と水分を盡けて行うことが望ましい。

【0033】また、エチレンは十分に乾燥しておくことが好ましい。

【0034】本発明によれば、クロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体からなる触媒に、更に光を照射し、エチレンの三量化反応が行うことが好ましい。光の照射により触媒活性が大幅に向上する等の効果が認められる。

【0035】本発明において使用される光は、特に限定するものではないが、例えば、紫外光、可視光、赤外光が挙げられ、発光波長としては、0.2〜2000nmの光が好ましく、より好ましくは200〜700nmの光が用いられる。また、光の照度は特に制限されないが、光源から光を直射することが好ましい。

【0036】光の光源としては太陽光又は人工光源のいずれを用いても良いが、太陽光は照度が小さく、天候に影響され、夜間の使用ができないことから、人工光源が望ましい。人工光源としては、特に限定するものではないが、例えば、重水素ランプ、キセノンランプ、タンダステンランプ、白熱電球、ハロゲンランプ、低圧水銀ランプ、ホーカソードランプ、金属蒸気放電管、メタルハイドランプ、高圧ナトリウムランプ、タリウムランプ、水銀-タリウムランプ、水銀-鉛ランプ、H型放電管、キセノン-水銀ランプ、高圧水銀ランプ、超高圧水銀ランプ、フラッシュランプ等が挙げられる。

【0037】光の照射時間は、特に制限するものではないが、クロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体からなる触媒系に照射してもよい。またエチレン三量化反応系に直接照射してもよい。具体的には、前者の場合は、(1)クロム化合物を含む溶液に光を照射して、その後アルキル金属化合物及び電子供与体を導入してさらにエチレンと接触させてエチレン三量化反応を行う。(2)クロム化合物とアルキル金属化合物を含む溶液に光を照射して、その後電子供与体を導入してさらにエチレンと接触させてエチレン三量化反応を行う。

(3)クロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体を含む溶液に光を照射して、その後エチレンと接触させてエチレン三量化反応を行う、といった方法により光を照射することができる。又、後者の場合は、(1)クロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体の存在下で光を照射しながらエチレン三量化反応を行う。(2)光照射を行なったクロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体からなる触媒の存在下でさらに光を照射しながらエチレンの三量化反応を行う、という方法により光を照射することができ、なお、光の照射時間は特に制限はされない。

【0038】本反応は、回分式、半連続式、連続式のいずれでも実施できる。三量化反応終了後、反応液に例えば、水、アルコール、水酸化ナトリウム水溶液等の重合失活剤を添加して反応を停止させる。失活した触媒クロム触媒は公知の脱炭処理方法、例えば、水またはアルカリ水溶液による抽出等で除去した後、生成した1-ヘキセンは、公知の抽出法や蒸留法により反応液より分離される。また、副生するポリエチレンは、反応液出口で公知の遠心分離法や1-ヘキセンの蒸留分離の際の残渣として分離除去される。

【0039】

【実施例】以下に、本発明を実施例を用いて更に詳細に説明するが、これらの実施例は本発明の概要を示すもので、本発明はこれらの実施例に限定されるものではない。

実施例1

内容積200mlのシュレンク管にトリカルボニル(1, 3, 5-トリメチルベンゼン)クロム(0)を5.1mg、0.125mol/リットルのトリイソブチルアルミニウム/シクロヘキサン溶液3.2ml、5.2mmol/リットルのシクロヘキシルイソニトリル/シクロヘキサン溶液7.7mlと乾燥したシクロヘキサン100mlを入れ、混合攪拌した。エチレン雰囲気下で、ウシオ電気製超高压水銀ランプ(500W)を用い、外部から光を10分間照射した。

【0040】温度計、触媒フィード管及び攪拌装置を備えた内容積300mlのステンレス製耐圧反応容器に前記反応溶液を仕込んだ。

【0041】反応容器を80℃に加熱し、攪拌速度を1,000rpmに調整後、反応容器にエチレンを導入して、エチレンの三量化反応を開始した。反応容器内の絶対圧力を40kg/cm²となるようにエチレンガスを吹き込み、以後、前記圧力を維持するように導入し続け、これらの反応条件を保った状態で5分反応を行なった。5分後、反応容器中に水を窒素で圧入することによって触媒を失活させて反応を停止した。

【0042】反応容器を室温まで冷却し、次いで脱圧した。反応液及び回収した気体中に含まれる生成物をガスクロマトグラフィーにより分析した。また、反応液に含まれる固体分をろ紙を用いてろ別し、これを風乾後、減圧下で乾燥(1mmHg、100℃)してその重量を測定した。結果を表1に示す。

【0043】実施例2

シクロヘキシルイソニトリルの代わりに、1, 2-ジメトキシエタンを表1に示す仕込み量で用いたこと以外、実施例1と同様にして反応を行なった。結果を表1に示す。

【0044】比較例1

シクロヘキシルイソニトリルを用いなかったこと以外、実施例1と同様にして反応を行なった。結果を表1に示す。

す。

【0045】

【表1】

触媒系	実施例1	実施例2	比較例1
Cr化合物 μmol	(C ₆ H ₅) ₂ Cr(CO) ₂ 20.0	(C ₆ H ₅) ₂ Cr(CO) ₂ 20.0	(C ₆ H ₅) ₂ Cr(CO) ₂ 20.0
アルキル金属化合物 μmol	i-Bu ₃ Al 400	i-Bu ₃ Al 400	i-Bu ₃ Al 400
電子供与体 μmol	C ₆ H ₅ NC 40	CH ₃ OCH ₂ CH ₂ OCH ₃ 10	—
反応条件			
反応温度 °C	80	80	80
エチレン圧 kg/cm ²	40	40	40
反応時間 分	5	5	5
結果			
触媒活性 kg-1-At/g-Cr-時間	28.9	21.5	31.5
液体 wt%	90.1	82.7	52.1
固体 (PE) wt%	9.9	17.3	47.9
液体中の生成物分布			
C4	0.5	0.9	0.8
C6	92.5	91.5	92.1
C8	4.4	4.4	4.3
C10	1.2	1.6	1.3
C12	1.4	1.7	1.5
C6他度 wt%	99.3	99.5	99.3

(注) (C₆H₅)₂Cr(CO)₂: 1404-20(1,3,5-トリメチルベンゼン)104(0)

C4:ブテン、C6:ヘキセン、C8:オクテン、C10:デカン、C12:ドデカン

液体wt%、PE:ポリエチレン、C6他=(1-ヘキセン/全ヘキセン)×100

【0046】

【発明の効果】本発明によれば、クロム化合物、アルキル金属化合物及び電子供与体からなる触媒は、触媒調製操作や取扱いが容易である。この触媒の存在下にエチレ

ンの三量化反応を行なうと、LLDPEの原料モノマーとして有用な1-ヘキセンを高い触媒活性でしかも高選択的に製造することができる。

【0047】